



TAISEI  
JUNIOR-SENIOR  
HIGH SCHOOL

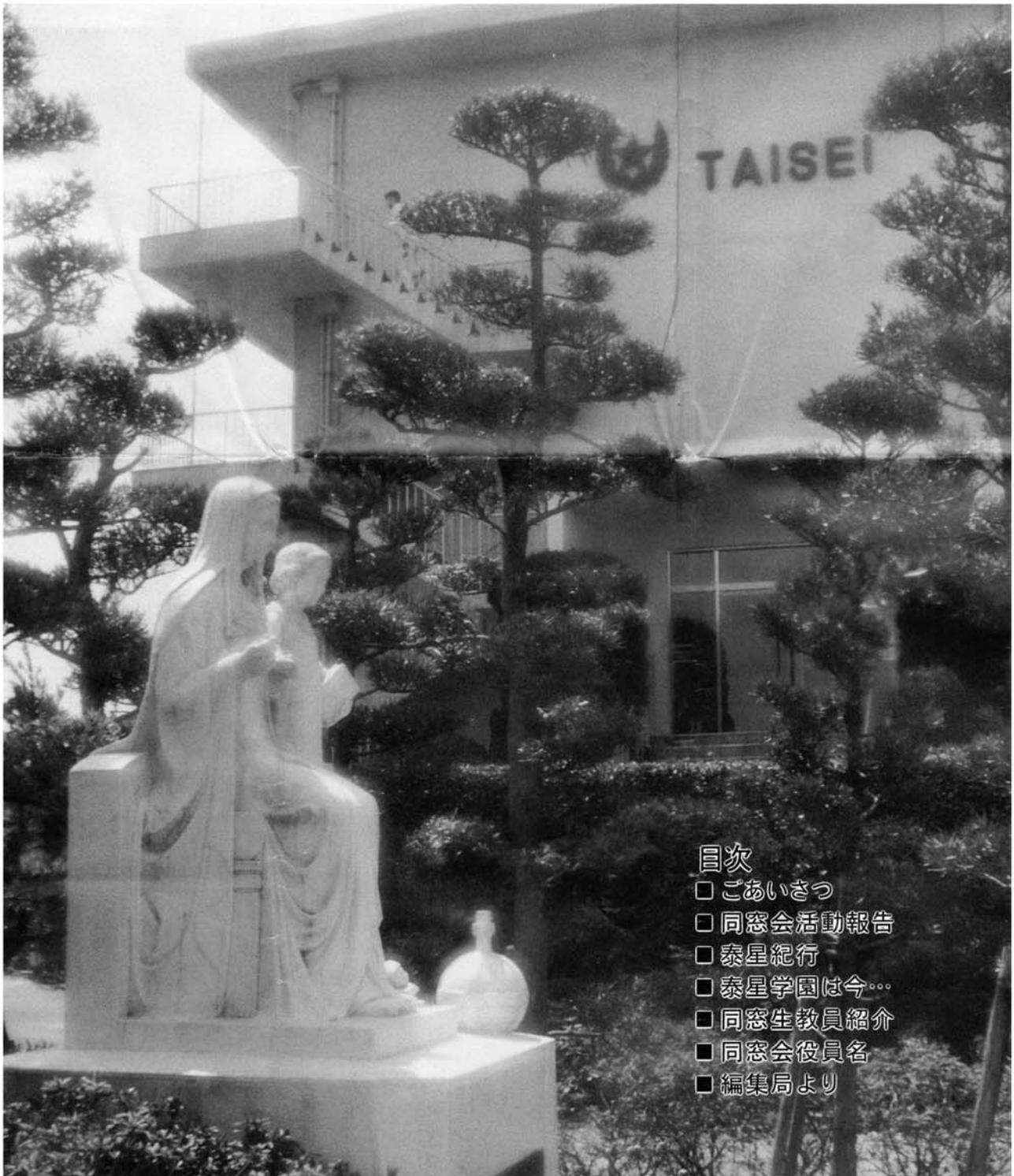
T A I S E I

# 泰星

泰星学園  
同窓会会報

第2号 1996.5月

発行元 泰星学園同窓会事務局  
〒810 福岡市中央区糠国1丁目10-10  
TEL (092) 712-7181 代  
FAX (092) 716-5036



## 目次

- ごあいさつ
- 同窓会活動報告
- 泰星紀行
- 泰星学園は今…
- 同窓生教員紹介
- 同窓会役員名
- 編集局より



同窓会会長  
久保 守

## 『新しい世紀に 向かって』

激動の日本。新しい世紀、西暦二〇〇〇年を指呼の間にのぞんで、今や我が国は、生みの苦しみを味わうかのような激変のたた中にある。経済も政治も外交も社会生活も、まさに新しいものを生み出すための苦悶のうちにたうち回っている観がある。とくに、マス・メディアは、ここ二、三年のうちに、電話もテレビもパソコンもファックスも全てが一体化して質的に変化する動向である。

この時に当り、同窓会の果たす役割、そして、その同窓会の中において、この機関紙の果たす役割は、計り知れないものがあるだろう。

何千、何万という同窓生を結ぶ紐帯は何であろうか。それは、三年あるいは六年の間、共に学んだという懐かしい思い出、そして、甘い青春時代を過ごした故郷のように過去のうちに屹立する淡い印象として母校という細い紐でしかない。

しかし、その細い紐も、その質如何によって、思いもよらない役割を果たすことになる。紙の紐か、はたまた、銅の紐か。いや、それは、豊満の物質のうちに混沌とする現代社会が持たない、精神の紐である。それは、どのような物質をもってしても断ち切ることでない紐である。そして、その精神の紐の象徴こそ、この機関紙である。

同窓会の、今後のさらなる発展を心から願ってやまない。



泰星中学・高等学校校長  
梶山 義夫

### 剛毅

頑固な意思とたくましい行動力

### 気品

純粹で清らかな心

### 誠実

正直、素直で謙虚な心

泰星の教訓について生徒手帳に記載されている説明である。卒業生の皆様方はこの三つの言葉について、当時の校長や神父からさまざまな形で話を伺われたにちがいない。今年度から校長に任命された私も学園の教育理念について考え始めたとき、先生方と協力しながら、どのように学校の雰囲気を作り上げていこうかと考えたとき、まず心に浮かんだのがこの校訓であった。この三つの徳が生徒の中に芽生え、根を下ろし、太い幹をもつ大樹として生まれいくなれば、この学園は福岡の丘に輝く世の光となるに違いない…。

# 剛毅 気品 誠実

誠実、気品、剛毅、しばらく三つの言葉に思いめぐらしていると、これらの言葉が生徒以上にこの私自身に迫ってくるのを感じた。この言葉が命をもたらす祝福として、希望を生み出す恵みとして、しかしさらに新たな生き方に招く勧告として迫ってきた。今の私の生き方に新たな挑戦を求める言葉。教育に携わる者として、司祭・修道者として、誠実に生きるとはどのようなことなのか。世俗化された社会の中で、気品をもって生活するには何が必要なのか。二十一世紀を目前に、一生を何かにかけるといことが多くの人々に理解されない時代において、剛毅とは何を意味するのか。…このような私自身を揺り動かす疑問とともに迫ってきた。今の私にはこの問いかけに対する明確な答えがない。しかし大切なことは、解答を無理に引き出そうとするよりもこの問いかけとともに人生の路を歩み続けていくことではなからうか。

皆様方も多忙な毎日の生活のなかで、校訓についてしばしば思いめぐらせていただければ幸いです。

## 同窓会活動報告

### 『イエズス会校同窓会連絡会』

第十三回イエズス会校同窓会連絡会が平成七年十一月二十五日栄光学園において開催され、①イエズス会校同窓生世界大会代表派遣②各校の交流活動の促進③カトリック教育に果たす同窓生の役割④会員情報管理(名簿・会報など)の現状と今後等の四議題について、話し合いがもたれ活発な意見交換がなされました。特に各校の交流活動としては、十月二十一日(出)、二十二日(甲)、栄光・六甲・広島三校のサッカー部OBの交流試合が盛大に行われました。

残念ながら泰星学園としては、メンバーの不足により今回は参加することが出来ませんでした。一方在校生としては、夏休みを利用して野球部の交流試合が行われ、生徒にとって忘れられない良い思い出となりました。今後は泰星同窓会として、同窓生諸兄に四校OB交流への積極的参加を呼びかけることが必要と思われます。会議終了後ひきつづいて懇親会に移行し、出席者一同さらに親睦を深めたのち次回の再会を約束し散会致しました。

親睦会の席上、泰星学園元校長曾根忠明師は阪神大震災の折、六甲学院の校長でありましたが、姉妹校関係者のお見舞並びに姉妹校関係者から寄せられた物心両面にわたる支援に対して「つくづく姉妹校とは有難いものだと思った」と改めて謝意を述べられたことを同窓生の皆様方にお知らせいたします。

尚、次回の第十四回イエズス会校同窓会連絡会は平成八年五月二十五日(出)、六甲学院にて開催されます。

## 平成七年度同窓の集い

平成七年七月一日(出)、午後6時より、博多パークホテルにて、本年度の担当幹事第二十六期、二十七日生企画にて、開催された。

まず久保同窓会会長の挨拶で始まり、「母校泰星学園も校長先生始め関係者の皆様方の努力により、着実に、私学の名門としての評価を確立して参りましたことに、敬意を表すとともに、心より感謝を捧げたい。今や、我が国は、多事多難の時期に遭遇致しております。その一つには、学校での「いじめ」社会では「反社会的宗教」等々、奇怪な現象が浮き彫りになりました。この時期にこそ、確固とした人間教育を内容とした、教育を確立しなければなりません。いま一つには、世界に通用する論理の確立であります。貿易、外交、等々世界を納得させる論理を展開しなくてはなりません。

この点、母校泰星は、世界に共通する論理を土台にして、深い人間性の育成を目指す教育を、長い伝統のうちに培って参りました。今こそ、この教育を受けた我々同窓生は、社会に貢献すべきときと、諸兄の活躍を念願すること切であります。この時も時、第三十一期(五十一年)の早川卓君が職を辞し、海外青年協力隊に参加して、カンボジアのプノンベン大学にコンピュータの指導、教育担当として赴任致しました。彼の行動に拍手をおくろうではないか」と力強い挨拶でありました。議事に入り、議長を末若直司氏(六回)を選出し、平成

六年度の事業報告、決算報告、平成七年度事業計画、予算計画、等々を満場一致にて承認された。参加者全員の記念写真撮影の後、懇親会にうつり、来賓に校長初め先生方を多数お迎えし、賑やかに年一回の再会に話も弾みました。最後に全員肩を組み校歌の大合唱をして、来年の再会を約束して、無事閉会しました。

平成八年度の開催は、七月六日(出)、午後六時より、博多パークホテル(同じ会場)にて、当幹事第二十七期、第二十八期生の企画運営で開催致しますので、多数の御参加をお願い致します。



九十六年二月にボランティアとして、カンボジアへ赴任します。カンボジアを知っていますか？

ここでカンボジアの紹介をするつもりはありませんが、一般のマスコミを通してのイメージは固定化されている印象を受けるのです。やはり馴染みの無い国についての報道の対象はセンセーショナルなものになりがちでしょう。また、カンボジアの現状を考えると、基本的な生活の面でリスクを抱えているのは確かなことでしょう。

しかし、カンボジアには9百万人の人々が生活しており、そこにはカンボジアの日常生活がある訳です。その中に溶けこみ、技術移転するのが私達の役割で、私はプノンベン大学でコンピュータの指導を行います。インフラはもちろん、日本の環境との

## 『カンボジアへ行く』 (31期 早川卓)

多いのですが、カンボジアの人々へ少しでも多くの技術を移転できるように努力するつもりです。それが私の貴重な経験になると考えています。



## 泰星会

### ゴルフコンペ

泰星会では春秋年2回ゴルフコンペを開催いたしております。今回は平成7年12月5日福岡レイクサイドカントリークラブで行いました。

当日はこの冬一番の冷えこみでしたが、みな和気あいあいとゴルフに興じました。

当日の優勝は28期卒の鈴木さんでした。

今後もつづけて開催いたしますので皆様の参加をお待ちしております。

連絡先 田中文男(6期卒)

TEL 843-5828





特別寄稿

# 徳利山

島本

第一期 要  
(昭和二十五年卒)

泰星高等学校第一回卒業生として母校を巣立った私は、その年上智大学文学部哲学部に入学、三年後にローマ・ウルバノ大学に留学した。イタリア滞在中身についたものの一つにワインがある。モンテフィアスコネ(徳利山)を訪ねたのもワインが好きだったからである。

モンテ・フィアスコネはローマから北へ二十キロばかり離れた海抜百メートル程のなだらかで日当たりの良い丘陵地帯で、一面ブドウ園である。麓には青いボルセナ湖が広がっている。

数百年前、一人の大修道院長がドイツからローマの旅の途中そこに立ち寄った。徳利山に近づいた時、大院長は同伴の修士に命じた。「お前は一足先に行って、美味しい酒所を探さない。探し当てたら、『EST』(ある)と書いて貼り紙しない。私はゆっくり飲んでローマへ行く。」忠実な修士は足早にモンテ・フィアスコネに入り利酒した。かつて味わったことのない美酒だったので、『EST、EST、EST、EST、EST』と書いてしまっ

た。最上級のワインと言う意味である。徳利山に辿り着いた大院長はそこでワインを口にした。それは、天下一品のそのまろやかな香り、舌触りの良さ、優にほほが落ちるような美酒であった。

一足先にローマ入りした修士は大院長の到着を待った。しかし約束の日が過ぎても大院長は現れない。仕方なく後戻りして見ると、大院長は徳利山で帰らぬ人となっていた。

教会墓地に埋葬することがゆるされず、町はずれの野辺に葬むられた。墓碑名は、今は苦むしているがラテン文で刻まれている。

ESTESTESTPropter nimum EST, Dominus meus hic mortuus est.

「ある、ある、ある。ESTの飲みすぎで、私の主人はこの地で生き絶えた。」大修道院長は亡くなった。しかし徳利山の「ESTESTEST」は今に至るまで「ある。」



## プロフィール

姓名

フランシスコ・ザビエル 島本要

生年月日

一九三三年二月二十四日

本籍地

長崎県新魚目町仲知津和崎郷三四一

学歴

一九四四年 四月 福岡 泰星中学校入学

一九四五年 三月 福岡 泰星高等学校卒業

一九四五年 四月 東京 上智大学入学

一九四五年 九月 ローマ・ウルバノ大学入学

一九四五年 六月 ローマ・ウルバノ大学にて哲学修士号取得

一九四五年 二月三日 ローマにて司祭叙階

一九四五年 六月 同上智大学卒業

一九四五年 二月 ローマ・クレゴリオ大学神学部修士コースに入学

一九四四年 二月 聖座外交官養成大学に入学

一九四六年 六月 聖座外交官養成大学卒業

職歴

一九四六年 二月 カトリック司祭叙階

一九四六年 九月 駐インド教皇大使館に書記官として勤務

一九四七年 一月 駐キューバ教皇大使館に一等書記官として勤務

一九四七年 九月 駐ブラジル教皇大使館に参事官として勤務

一九四七年 三月 横浜教区松本教会主任司祭

一九四七年 三月 横浜小神学院院长

一九四七年 三月 浦和司教に任命

一九四八年 三月 浦和司教に就任

一九四九年 三月 長崎大司教に任命

一九四九年 三月 長崎大司教区カテドラル

一九四九年 三月 浦上教会にて着座



# 一枚の答案

柴田 昌熙

第三期（昭和二十七年卒）

前略  
拙文恐縮、適当にご掲載下さい。趣意に添えず申し訳ない。よろしく。とり急ぎ  
四月五日早朝日本を立ちます。

畏友にして同窓会報編集局の森 邦蔵君の懇望黙々しく、あわただしい出発の間際に筆をとった次第。この拙文を書いている時点では未だ現職として母校のキース・ウーリック神父と校長会で顔を合わせている状況だが、この会誌が同窓生諸氏の手許に配布され一読に供されている頃は、小生、フランスのオーベルニュ、クレルモン・フェラン大学の校舎で世界の連中とともに若者然と口角泡を飛ばして、討論している頃と思っ。貧しいながらも豊かな自然に恵まれ、詩情豊かだった僕達のあの頃、思い出は尽きないがその中のシーンだけを回想して責任を果たしたい。

あれは高校二年の時だったか。マリア会のジョルゲンス総長が日本訪問の途中、本校にも立ち寄られることになって、急遽フランス語劇の上演ということになり、船倉友重君（在ロサンゼルス）と先号で登場の野田宏一郎君（ちなみに彼のペンネーム昌宏は小生の昌熙の転用）と僕の三人に白羽の矢が立った。僕は寝耳に水、思わず師の（M.Henri

Humbertlaude）を見て、いたまらっぽくニッと静脈の浮き出た細い鼻の下で笑った。というのは僕はフランス語の授業の最初の頃、すでに動詞のコンジュガシオン（活用）が面倒で小テストでもかなりいい加減にやっていたのに、ハンベルクロード師は執拗に（？）間違いの箇所を朱を入れて訂正し捕捉して離さない。それは正に逃れようとする者と追う者との戦いのような観すらあった。

とにかく、演目はモリエールの「気度病む男」となり、且つて東京帝国大学で田中耕太郎氏などにも教えたモリエールの専門家である師の特訓が始まったがこれが大変。時間も切迫している三人の役者共は監督の期待にこたえる感性と能力と努力に大幅に欠け、師をハラハラさせながらついに当日とはあいなった。結果は当然惨たんたるもの、師がプロンプターとなってもぐり込んだテープルの中からの声は次第に焦燥と音量を増し、ついには、役者共のセリフのそれと変わらぬ、直接観客の耳に飛び込んで行く状況、小生達はただドギマギと出来の悪いマリオネットのような体たらくで金しばり同然、わずかな自信と横着なハートもすっかりどこかへ。悪夢の数十分後、師の悄然とした姿に我々三人はおそまきながら慚愧の念で一杯となった

次第。

師はよく授業の終わりがけに鎖つきの銀製の懐中時計をあげて時刻を見た。その裏蓋には彼が勇躍、東洋宣教への熱きおもいをもってマルセーユから船出した若き日の思い出が刻まれていた「マリイより愛するアンリへ」私はリスのようにはすばしくそれを見てとったのだ。師は僕と視線が合うと急いで時計の蓋を閉じた。そしてポツと白い頬に血がのぼった。

師が東京で亡くなったと聞いたのはいつの頃だろう。

先生はかならず彼の生地マッシフ・サントラルの南を訪れることがあった。彼の若き日の故郷の丘は白く風が吹いていた。

名もなく宣教に捧げたひとすじの人生、そして今僕はあらためて彼の生地近くに学ぶことになった。私の知っていた師と今僕は同年令だ。おそらく偶然ではあるが、しかし朱を入れた訂正だらけの受け者の一枚の答案がヒラヒラと二人の間を高く舞った。そう確かに思った。



ハンベルクロード師

## プロフィール

昭和九年生れ。  
昭和二十一年泰星中学入学。  
昭和二十七年泰星高校卒業。  
昭和三十二年福岡学芸大学（現福岡教育大）卒業。  
昭和三十三年より三十六年まで母校高校社会科教師を勤める。  
昭和三十六年四月より精華女子高等学校勤務。生徒指導部長、進路指導部長として生徒指導に尽力。教務部長として普通科、情報ビジネス科併設の女子高としての充実に寄与し、昭和五十二年より教頭、副校長を経て、平成二年四月より八年三月退職まで校長として同校の発展に多大な貢献を果たした。特に同校のプラスバンドは有名である。  
なお平成一年十一月には文部大臣より教育功労賞として表彰を受けている。



同窓生教員紹介



保健体育 (11期) 久 良 八 尋

一九六四年四月、私がマリア会経営の泰星高校に奉職して、早や三十三年となった。長い間には、多くの先輩の先生方や生徒諸君と出会い、そして別れていった。

振り返ってみると、この長い間の教員生活の中で、「染み」や「垢」が身についてしまったように思う。考え方の固癖、行動パターンなど、ここ最近、技術の変化はあっても、特に感動を受けるような出来事が、全くと言ってよほど無い。

「生徒を指導する」とこの言葉は非常に素晴らしい聞こえるが、この言葉の裏には口では言い表せないような「苦労」と「苦悶」そして「疲労」、「ストレスの連続」がある。特に、我が校は私立学校であり、公立と違って転勤、移動はない。自分の都合で逃げ出すわけにもいかず、同じ職場で仕事をすることは「志」を持つしか方法はない。

専門的なものを指導するだけでは、これほど苦勞することもなからず、それ以外の分野、人間を育てること、これが非常に困難なことなのである。

我が家系は神宗の流れを組む宗派であるが、特別に信仰しているものもないし、内容も知らない。泰星の人生の中で、私はキリスト教とその信者の人々と出会い、多くの感銘を受けたり、また悪い影響も受けたりして多くのことを学んできた。一時的ではあるが、キリスト教の研究もした。本も数多く読んでみた。しかし、現実派である私には、遠くを考える夢のような話には、現実離れという感を拭いきれず、信仰とまで至ることはなかった。

「私自身のこと」

「自然」私はこの言葉が大好きである。山を見、海を見て、その大ききその中で生きる動物の動きに大きな感銘を受ける。先日、こんな話を聞いた。有明海のお海

が今年は大漁であるという。こんな年は、魚介類特に貝類は育たないそうだ。「玉珠(たいらぎ)」の漁師は半年の三分の一に落ち込んだという。また、毎年渡ってくる渡り鳥の数も激減している。山は伐採され、海は埋め立てられて、自然破壊は毎年進んでいる。

昭和三十九年から、生徒と共に自然の中で生活の経験を毎年重ねており、今年で三十回目を迎える。人の住んでいない場所、自動販売機もない場所を見つけて自給自足の生活を目指してキャンプを実施してきた。これまでは、台風にも大雨にも遭遇したし、五日間全く泳げない年もあった。しかし、「時間・場所の拘束のない生活を体験させたい」という思いは変わらない。むろん、無制限というわけにはいかない。教員一名に生徒二十名程度のグループでの行動範囲のみに限定はされる。私は、このような生活体験をさせることによって心の絆を作ってきた。

同窓会が集いのある毎に、この高校時代の思い出として、年齢の隔てなく毎年語り合われている伝統的な経験である。その語り合いが私にとって一番の楽しみなのである。



事務長 (10期) 中 島 幸 男

昭和七年に歩み始めた本学園も本年度創立六十周年目に入り、泰星が福岡教区からイエス会に経営が移管された時に、故大野神父様、チリノ神父様と共に泰星にお世話になる事になりました。当時、中学校在職するという時期で、中学の一期生に当たる四十一期で、水谷先生(教学)と共に担任を受け持つという事で、他の姉妹校に見学に行ったのが、四十七期よりと思えてなりません。その後、四十七期を卒業させました。母校で教員として教えるを受けた恩師により、直接日々指導を受け、励まされる事により、時として自己を見失いがちになる時に、大きな支えとなっており、現在、中三の学年主任として五十一年の指導に当たっております。西暦二千年の時代に彼等がたくましく生きて行くように願っております。



(10期) 市 川 公 夫

なおい層教育事業と学園発展のために献身していく覚悟であります。どうか同窓生の皆様方これからも母校に暖かい目を向け、母校の発展のため協力して頂ければと念じています。

母校に奉職しはや二十年を経過しました。学園と同窓会の会計を担当しています。学園の発展は着実と思えますが更なる発展の為、皆さんと共に頑張りたい。よろしくお願ひします。



英語科 (24期) 高 林 正 規

早いもので、本校で教鞭をとりだして今年で十五年目に入ります。泰星が福岡教区からイエス会に経営が移管された時に、故大野神父様、チリノ神父様と共に泰星にお世話になる事になりました。当時、中学校在職するという時期で、中学の一期生に当たる四十一期で、水谷先生(教学)と共に担任を受け持つという事で、他の姉妹校に見学に行ったのが、四十七期よりと思えてなりません。その後、四十七期を卒業させました。母校で教員として教えるを受けた恩師により、直接日々指導を受け、励まされる事により、時として自己を見失いがちになる時に、大きな支えとなっており、現在、中三の学年主任として五十一年の指導に当たっております。西暦二千年の時代に彼等がたくましく生きて行くように願っております。



理科 (33期) 吉 松 謙 吉

長い学生時代を終え、母校に着任して三年目の春を迎えました。多くの先生方に助けていただきながら、少しずつ教師というものの在り方を学んでいます。

「理科」という科目を通して、学力面はもちろんですが、後輩とする生徒達に何か大切なものを伝えられたらと、毎日共に悩み、そして楽しんでいきます。



社会科 (25期) 中 山 信 一 郎

思い起こせば私と泰星との関係はおよそ二十年近くを数えることになりました。高校時代に学生として通った三年間、大学生になってから寮の舎長として働いた一年間、そして教師として教壇に立った十六年間で、現在四十才の私の人生のちょうど半分の時を泰星とともに歩んできたことになりました。これからはますます泰星とかわり合ふ比重が増えることになるのです。このような節目の時期に今までの自分を振り返った時、果たしてどれほどのものを泰星にしてくれたのだろうかという問いかけに対してほとんど自信を持って答えることができない自分に情けない思いがします。

これからはもっと積極的に自分に何ができるのかということと真剣に考えて、学校の発展にできるだけ前向きに取り組んでいこうとこの場で思いを新たにしたいと思います。



英語科 (30期) 村 上 勤

初めて英語と出会った時から、将来は英語の教師になりたいと思っていた。途中でいくつもの挫折があり、遠回りもした。いくつもの偶然が重なってこへたと感じている。夢がかなった。PROVIDENCE



国語科 (31期) 吉 竹 孝 介

三十一期卒業生の吉竹孝介です。泰星を卒業後、しばらく東京に在住し、出版社等に勤務しておりましたが、平成三年一月より泰星に国語教員として戻って参りました。現在、高三の担任、進路指導部などの仕事をしております。どうぞ宜しくお願いいたします。



数学科 (29期) 大 石 英 雄

二十九期卒の大石です。現在中学校・高等学校の数学科を受けております。部活では平成七年度の中学ハンドボール新人福岡市大会において又同県大会において念願の初優勝を遂げることができました。今後ともOBの方々のあたたい、ご指導・ご鞭撻の程よろしくお願ひ致します。

大神秋男	伊藤公喜	武田武邦	瓜生叶	川辺義隆	松井梓	大野満	藤岡清広	平岡忠	井土義雄	辰己悠典	熊谷高信	山下謙二	渡辺綱太郎	矢野慎治	山田哲士	柴田正勝	筑柴哲彦	加藤啓祐	末若直司	酒井偉彦	田中一男	森邦蔵	江副正一	常任理事	市川公夫	會計	増崎三則	監事	島田征児	敷田廣志	大串安弘	田中文男	松尾秀夫	副会長	久保守	会長
9	9	9	9	9	8	8	8	8	8	8	7	6	5	5	4	4	4	4	6	3	3	3	5	10	2	2	11	8	6	6	5	5	9	旧制		
				33年卒				32年卒	31年卒	30年卒			29年卒					28年卒				27年卒	34年卒	24年卒	24年卒	35年卒	32年卒		28年卒	27年卒		19年卒				
鈴木弘幸	迎洋介	江口利彦	武田憲明	瀬里浩之	佐田宏一	鶴雄介	石上豊彦	斎藤純	中山信一郎	高林正規	平田勇二	高木昇	重松繁	川村浩之	因幡博	宮崎淳二	川端健生	青木彰	上原勉	遠藤信広	岩室義安	小平陽一	荒木俊彦	中川等	前田雅晴	西川正史	福田健	蔓年康則	加藤郁夫	柴田昭二	中田博志	山田孝高	宮崎一之	八尋良久	柳原秀樹	中島幸男
28	28	28	27	27	27	26	26	25	25	24	24	23	23	23	23	22	22	22	21	20	20	20	20	18	18	18	18	17	15	14	13	12	11	11	10	10
		52年卒			51年卒		50年卒		49年卒		48年卒				47年卒			46年卒	45年卒					44年卒			42年卒	41年卒	39年卒	38年卒	37年卒	36年卒		35年卒		34年卒
小林勲	磯貝健哉	徳永圭祐	日浦正仁	瓜生喜政	小田幹夫	堤浩史	末永哲宏	江崎嘉十	古賀栄一	高宮滋	河千田伸一	村上修一	星野俊幸	渡辺愛介	本多敏昭	新井寿	八木路可	中島康雅	木村尋司	楠元研二	王丸清近	近江团	吉松謙吉	近江淳	松井亨	栗原直樹	稲木均	茨木健一	権田淳一	安藤康伸	早川卓	岡留次郎太	大川畑誠	東慎誌	大石英雄	本庄哲
41	41	40	40	40	39	39	39	38	38	38	37	37	37	36	36	35	35	35	35	34	34	34	33	33	33	33	32	32	31	31	30	30	30	29	29	29
	H2年卒			H1年卒			63年卒			62年卒			61年卒			60年卒		59年卒				58年卒				57年卒		56年卒		55年卒			54年卒		53年卒	
	高尾佳嗣	飯田大輔	原田聡志	濱孝介	杉原裕一郎	遠藤元基	城谷剛	呉貴文	林秋彦	松本信助	松尾嘉典	後山泰一	柳潤	眞田一光	三ヶ尻佳貴	野上堅太郎	村上寛	中村匡助	辛英明	甲斐哲嗣	石橋隆光	長谷川知久	吉原巖	東義隆	磯員光在	天羽純一	金子伸介	樋口惣	牛島誠	関本勝也	白土睦人	白壁勝直	草場暁登	花岡一誠	野巴樹	
	47	47	47	47	47	47	47	47	46	46	46	46	45	45	45	45	45	45	45	45	44	44	44	44	44	44	43	43	43	42	42	42	42	41	41	41
								8年卒				7年卒							6年卒								5年卒			4年卒				3年卒		H2年卒

編集後記



総刊号を発刊して早くも1年が過ぎました。同窓会の活動報告や学園の現状を同窓生の皆様方へ伝えることを第一の目的として取組んでおります。お陰様で、今回も貴重なご意見ご感想をいただき発刊する事が出来ました。号を重ねるごとにもっと深みのある記事内容にしていきたいと緊張しておりますので皆様方もどんな事でも良いので寄稿をお願い致します。

委員 田中 文男 (6回卒)  
島田 征児 (11回卒)  
迎 洋介 (28回卒)

平成8年度 泰星学園同窓会総会のお知らせ

拝啓 同窓生の皆様におかれましては、益々ご清栄の事とお喜び申し上げます。さて、平成八年度の同窓会総会を左記の通り開催致します。どうかお誘いあわせの上多数ご出席をお願い致します。

同窓生各位

同窓会会長 久保 守

●日時 7月6日(土) 6時(総会) 7時(懇親会)

●場所 博多パークホテル 博多区博多駅前4-11-18

電話 451-1151

●会費 6,000円(年会費3,000円含) 学生2,000円

主幹事世話人 27回生 武田・瀬里

副幹事世話人 28回生 迎・鈴木・江口

追伸 なお、連絡不行き届きの同窓生の方もおられると思いますので、1人でも多くの方をお誘い頂きたく存じます。出欠の確認は各学年の理事より電話にてさせていただきます。